

研究ノート

ニューマン原作賛美歌の邦訳について

長 倉 禮 子

Japanese Translation of Newman's Hymns

Reiko Nagakura

我が国にキリスト教が初めて伝えられた16世紀半ば、賛美の歌は歌われていたであろうが、ミサではラテン語が用いられており、賛美歌も日本語のものはなかったと思われる。それから長い迫害と禁教の時代を経て、19世紀末プロテスタント教会の宣教が始まった頃、賛美歌はその宣教師たちによって日本語に翻訳され、翻訳賛美歌を中心とした賛美歌集が各教派で刊行され歌われるようになった。明治初年にはすでに数種の賛美歌集が出版されていたことは知られているが、出版社や出版年は不明である⁽¹⁾。賛美歌集はその後様々な過程を経て改定されていったが、各会派の協力によって1888年（明治21年）に刊行された『新撰賛美歌』に、ニューマンを紹介する初穂として“Lead, Kindly Light”の邦訳が収められているのである。この賛美歌はカトリック教会の聖歌集には一度も加えられたことがないが、日本基督教団および日本聖公会では今日に至るまで愛唱され続けている。本稿はこの“Lead, Kindly Light”を主に、また*The Dream of Gerontius*からとられた他の二編の賛美歌をも含めて、ニューマン原作の賛美歌が我が国でどのような過程をたどったのかを簡単に跡づけてみようとするものである。

“Lead, Kindly Light”⁽²⁾はニューマンがまだ英国教会に属していたオクスフォード時代の1833年、地中海周遊の折につくられた詩で、「あらゆる賛美歌のうち最も高く評価されるべき数少ない詩のひとつ」⁽³⁾とまで言われるものである。*The Dream of Gerontius*のほうはカトリックになってからの1865年、死を身近に感じたというニューマン64歳の時の作品で、これもまた「題材の点からいって英詩中殆ど全く他に類を見ない」⁽⁴⁾と評価される詩である。これらの詩は賛美歌として我が国でどのように翻訳され歌われてきたのだろうか。その変遷の跡づけを試みるまえに、先ず“Lead, Kindly Light”の誕生の背景となったニューマンの地中海周遊の旅について、および*The Dream of Gerontius*の内容についてごく簡単に述べておくことにしたい。

『四世紀のアリオス派』(*The Arians of the Fourth Century*)の執筆で健康を害してしまった32歳のニューマンは、病弱の友人フルード(Richard Hurrell Froude)がその父と共に療養のため地中海周遊の旅に出るのに誘われて彼らに同行した。彼らは1832年12月8日英国南西部のファルマス港(Falmouth)を出航し、スペインのカディス(Cadiz)に寄港し、ジブラルタル海峡を通過してアフリカ北部のアルジェ(Algiers)などを歴訪したのちマルタ島(Malta)でクリスマスを迎えた。12月30日にはイオニア諸島の一つコーフュー島(Corfu)に着き、そこから再びマルタ島を訪れ、約一か月間そこに滞在した。2月初旬船を乗り換え、シチリア島のメッシナ(Messina)、パレルモ(Palermo)経由でナポリへ向かい、ナポリにおよそ二週間滞在し、3月2日ようやくローマに到着した。彼らにとってローマの印象は強烈なものであったらしいが、途中ほんの数日立ち寄っただけのシチリア島は、抗し難いほどの魅力でニューマンを虜にってしまったようである⁽⁵⁾。ニューマンは人々の反対を押し切り、帰途につくフルード父子とは4月9日に別れて再びナポリに行き、そこからシチリア島に向かい、21日にメッ

シナに着いた。しかし、彼はシチリア島の各地を巡るうちにひどい熱病にかかり、カストロ・ジョヴァンニ(Castro-Giovanni)で三週間ほど病の床に伏すことになるのである⁶⁾。ニューマンはその床で「私は光に対して背いたことがないのだから、死にはしない」と繰り返していたというが、やっと一命を取り止め回復してからは、「英国でなすべき仕事がある」と切に帰国を願っていた。心ははやっても帰国の為の船がなく、船を待って更に三週間パレルモに足止めされ、ようやくパレルモからマルセイユへ向けて出発できたのは六月も半ばであった。マルセイユに向かうその船中で、この不朽の名詩“Lead, Kindly Light”は生れたのである。ボニファチオ海峡でまたもや嵐のため、一週間の停泊を余儀なくされ、ニューマンが故郷に帰り着いたのは1833年7月9日であった。その翌週の日曜日7月14日にジョン・キーブル(John Keble)がオクスフォード大学の説教壇から「国民的背教」(‘National Apostasy’)なる説教を行い、それによってオクスフォード運動の火蓋が切られたことは良く知られていることである⁸⁾。

*The Dream of Gerontius*はニューマン64歳の時の作品であることは前述した。ニューマンはこの頃死を予感していたらしく、当時の彼の手紙にはその予感が表現されているが、彼の死はまだ20年以上先のことである。この詩は一人のカトリック信者が死を前にしてみた幻想を詠ったもので、死後魂が肉体を離れてキリストのみ前に出るまでの目に見えない世界を扱っている。詩は7節からなっており、第1節は臨終の床にあるゲロンティアスで、第2節はすでに肉体を離れたゲロンティアスの魂が、かつて経験したことのない感覚に驚いている。第3節は、ゲロンティアスと天使との対話で、天使たちからいろいろと教えられるが心は安らいでいる。第4節は、魂が空中を去っていよいよ神のみ前に近づいていくところであるが、悪魔の叫び声を聞く。第5節では、ゲロンティアスは清らかな天使たちの歌声を聞いて神の玉座に近づいていることを知る。第6節は詩のクライマックスで、キリストの前にひれ伏し救いを求めている苦悩と信頼に満ちたゲロンティアスの魂の絶唱で、終節は煉獄に下った魂が未来の救いを待っている静かで明るい希望の詩となっている。邦訳賛美歌に採られているのは第1節のゲロンティアスの信仰宣言“Firmly I believe and truly”と第5節の天使たちの第5合唱“Praise to the Holiest in the height,”である。

キリスト教の賛美歌の日本語版は明治5年(1872)にはじめて試作されたといわれる。しかし、その翌年には実に7種類の日本語賛美歌集がいずれも新教側から出版されているのである。この流れはしばらく継続して、賛美歌は新教の各教派で個別に発達し、それぞれに独自の賛美歌集を編集して使用していた。明治21年(1888)に至ってようやく合同の気運が熟し、一致教会、組合教会、日本聖公会等から選ばれた賛美歌委員会の手で『新撰賛美歌』が警醒社から出版された。翌年末オルチン(George Allchin)編のローマ字版が出、明治23年(1890)には改版『新撰賛美歌』が上梓された。この賛美歌集は文学的にも優れたもので、当時の我が国の詩壇に少なからぬ影響を与えたことは周知の通りであるが、その第163番に“Lead, Kindly Light”がラテン語の表題“Lux Benigna”を冠して載っている。その他の賛美歌の表題もすべて外国語である。しかも和訳された歌詞も日本文字ではなく「ローマ字会およびヘボンによるローマ字」で表記されている。これが8月に出た版だが、同じ内容のものが12月に「植村正久著者兼発行者」で日本文字で発行された。⁹⁾(神戸女学院図書館蔵オルチン文庫中の版は、昭和54年に新教出版社により復刻されている。)¹⁰⁾「みめぐみあるひかりよ かこめる」で始まる“Lead, Kindly Light”の訳詩はおそらく、賛美歌委員会の委員でもあり日本文字版の「著者」を自称している植村正久のものであろう。(明治44年4月22日号の『福音新報』には植村によるこの詩の「なさけある光よ」という別の訳と解説がのっており、後に岩波文庫版の『植村正久文集』に収められているが、これは賛美歌風ではなく、いわば忠実に翻訳したものである。)

その後プロテスタント各派は協力して明治33年(1900)に賛美歌委員会を組織し、明治36年(1903)には最初の共通『賛美歌』を、つづいて昭和6年(1931)には従来の英米を中心としたものに、ドイツをはじめヨーロッパの賛美歌及び日本人の作品などを加えて共通の賛美歌集を刊行している。

一方、日本聖公会では明治34年(1901)に『古今聖歌集』(古今聖歌集編纂委員会編)を出しており、

“Lead, Kindly Light” は第 329 番にダイクス (John Bacckus Dykes) の曲譜で「みめぐみあるひかりよ ひはくれ」で始まる歌詞で収録されている。同聖歌集には *The Dream of Gerontius* から採られた “Praise to the Holiest in the height” も「いときよきかみを」(393 番) の歌詞に含まれているが(曲譜は同じくダイクスのもの)、2 編のいずれも訳者不明である。この聖歌集は大正 11 年(1922)に改訂版、昭和 33 年(1958)に改定増補版が出たが、ニューマンの原詩による聖歌については異動がない。

日本基督教団賛美歌委員会は、戦後いち早く昭和 20 年(1945)に昭和 6 年版の暫定的改革を行ったが、その 9 年後の昭和 29 年(1954)に、明治期から継承されてきた文語体の歌詞を現代仮名づかいに改めるなどして新しい『賛美歌』を刊行した。この『賛美歌』においては “Praise to the Holiest in the height” は曲譜はこれまで通りダイクスのものであるが、訳詩は「うえなくとうとき」で始まる比屋根安定のものに変えられた。またこの『賛美歌』には、上記の 2 編の他にこれも *The Dream of Gerontius* からの “Firmly I believe and truly” が「三一の神」(72 番)と題して収載されている。「われ信ず 三つなるひとりの神を」で始まる邦訳は豊田実の手になり、曲譜はストッド (J. G. Christian Stod) のものである。

昭和 46 年(1971)に出た『賛美歌』の改訂版は “Lead, Kindly Light” の訳詩を「たえなる道しるべの光よ」で始まる三輪源三訳のものと差し替えている。この賛美歌にはその後、「さびしき夜道あゆむ」、「あまつひかりよ」などの題名で知られる別の邦訳も試みられているが訳者の記載はない。

『古今聖歌集』は昭和 34 年(1959)版(日本聖公会管区事務所著作発行)に至って上記の 3 編をすべて収録した。第 132 番が「主はみつにまして ひとりのかみと」で始まる “Firmly I believe and truly”、第 323 番が「いときよきかみを ほめたたえよ」で始まる “Praise to the Holiest in the height”、第 427 番「みめぐみあるひかりよ ひはくれ」で始まる “Lead, Kindly Light” である。これらのうち “Praise to the Holiest in the height” の訳詩はこの聖歌集の先行諸版のものと異なっているが(出だしは同一である)、その訳者も含めてこれら 3 編とも誰の訳になるのか不明である。曲譜は在来の 2 編はダイクスのもので変わりはないが、新収の「主はみつにまして ひとりのかみと」は英国の伝統的メロディーを借りている⁹⁾。なおニューマンの原詩による賛美歌に関しては現行(昭和 34 年版を昭和 52 年に改訂した版)の『古今聖歌集』も従前通りである。

日本基督教団賛美歌委員会は昭和 19 年版の『賛美歌』を根本的に見直す作業を昭和 45 年(1970)からはじめ、実に 20 年以上の歳月を費やして本年(1997)2 月ようやく『賛美歌 21』として刊行の運びに至った¹⁰⁾。この賛美歌集では “Praise to the Holiest in the height” と “Firmly I believe and truly” は省かれ、“Lead, Kindly Light” だけが「やさしき道しるべの」という新しい訳で載せられている。曲譜はダイクスのものである¹¹⁾。訳者名の記載は無い。

以上見てきたニューマン原作の賛美歌 3 編の邦訳は次のとおりである。

I. *Lead, Kindly Light*

『新撰賛美歌』(賛美歌委員会編 明治 21 年)第 163 番

- 1 みめぐみあるひかりよ かこめる
くらきなかにもわれを みちびけ
夜はくらく家はとほし 我を導きたまへ
- 2 わがあしをまもりてよ いかにと
遠方(とおく)をまでみんことを のぞまんや
わが身のためにはただ ひと歩みにてたれり
- 3 われはさだめなき世に さすらひ
おそれなきにあらねど ころろは
たかぶりにしたがひぬ 過ぎし日をな思いそ

- 4 みちからはかくながく しのびて
我を祝したまへば やまにも野にも
夜のすぐるまで尚も 導きたまはん
- 5 あしたの来たらんときに わがもと
したしみてまたしばし わかれし
かみのつかひのかほは えみつつ我をむかへん

『古今聖歌集』(古今聖歌集編纂委員会編 明治34年) 第329番

- 1 みめぐみある光りよ 日はくれわが家はいととほし
さびしき闇のなかにまよへる われをみちびきたまへ
- 2 とほくまで見ることを のぞまじ主よわがよわき足を
まもりてゆくての一步(ひとあゆみ)を しめしたまはばたりなん
- 3 われはさだめなき世に さすらひおそれなきにあらねど
たかぶりあだにすごしし年を 主よわすれたまいてよ
- 4 みちからはかくながく しのびて我を祝したまへば
山にも野にも夜のあくるまで なほもみちびきたまはん
- 5 とこしへの曙となりなば 世にてなごりをしくも
わかれし友のかがやく顔は えみつつわれをむかへん

『賛美歌』(賛美歌委員会編 昭和46年) 288「信頼」 三輪源三訳

- 1 たえなるみちしるべの ひかりよ、
家路もさだかならぬ やみ夜に、
さびしくさすらう身を みちびきゆかせたまえ。
- 2 ゆくすえとうく見るを ねがわじ、
主よ、わがよわき足を まもりて、
ひとあし、またひとあし、 みちをばしめしたまえ。
- 3 あだなる世のさかえを よろこび、
ほこりておのがみちを あゆみつ、
むなしく過ぎにし日を わが主よ、 忘れたまえ
- 4 しるべとなりたまいし ひかりよ、
今よりなおも野路(のじ)に 山路に、
闇夜のあけゆくまで、 みちびきゆかせたまえ
- 5 とこ世のあさにさむる そのとき、
しばしの別れをだに なげきし
あいするもののえがお みくににわれをむかえん。

『賛美歌 21』(日本基督教団賛美歌委員会 平成9)「信頼」

- 1 やさしき道しるべの 光よ、
家路はなおも遠く 日は暮れ、
さびしくさすらう身の 行くてをてらしたまえ。
- 2 行くすえ遠く見るを 願わず。
よろめくわが歩みを 守りて
ひと足またひと足 導き行かせたまえ。
- 3 世の栄えとちからを よろこび、

誇らかにわが道を急ぎて、むなしく過しし日を
わが主よ、忘れたまえ。

- 4 み恵みたしかなれば、今なお
わが主は導きたもう 旅路を、
み国の朝あけ初め み顔を仰ぐ日まで。
- 5 み使いらとみ前に 立つとき、
しばしの別れをさえ なげきし
愛するものの笑顔ふたたび 会ううれしさ。

II. Praise to the Holiest in the height

『古今聖歌集』（古今聖歌集編纂委員会編 明治34年）第393番

- 1 いときよき神を ほめたたへよ
御業（みわざ）も御法（みのり）も たへにくすし
- 2 よのひとことごと つみのしたにあへぎ
くるしむを たれかすくはん
- 3 とりこにせられし 人のすえは
あだなるサタナを うちきためぬ
- 4 世に來しひとのこ 人の性（さが）に
かみのきよき性（さが） そなへたまふ
- 5 人のつよき仇 うちしきみは
身と魂（たま）のなやみ いたくうけぬ
- 6 園（その）にひざまずき 木にあげられ
耐へまた忍びを 世におしへぬ
- 7 いときよき神を ほめたたへよ
御業も御法も たへにくすし

『古今聖歌集』（日本聖公会管区事務所 昭和34年）第323番「子なる神」

- 1 いときよきかみを ほめたたえよ
みわざもことばも たえにくすし
- 2 サタナのとりこを すくうために
みくらをくだりて 主はきませり
- 3 世にきしひとの子 かみの性（さが）に
ひとのまたきさが そなえたもう
- 4 アダムのすえなる ほろびの子を
血をもてあがない きよめませり
- 5 ひとのつよきあた うちしきみは
よびとのかなしみ おいたまえり
- 6 そのにひざまずき 木にあげられ
世にかつちからを あたえませり
- 7 いときよきかみを ほめたたえよ
みわざもことばも たえにくすし

『賛美歌』(賛美歌編纂委員会編昭和29年)「救贖」264 比屋根安定訳

- 1 うえなくとうとき かみをほめよ
みことばくすしく 教(のり)はかたし
- 2 つみの世あがなう 主をくだしし
すくい神をば あがめまつれ
- 3 血をもてわれらを すくいたもう
主イエスの恵みは げにかしこし
- 4 くるしみしのびし わが主のあい
世のためたたかう つよきあいよ
- 5 うえなくとうとき かみをほめよ
みことばくすしく 教はかたし

Ⅲ *Firmly I believe and truly*

『古今聖歌集』(日本聖公会管区事務所著作発行 昭和34年)第132番

- 1 主はみつにまして ひとりのかみと
しんじかしこみて みいつをあがむ
- 2 みこはひとのさが とりてこの世に
うまれたまえりと まことに知りぬ
- 3 ほふられたまいし ひとの子イエスよ
おもいもわざをも みな主にささげん
- 4 せいなる教会(みからだ) のこしたまいて
みおしえあたえし 主イエスをたたえん
- 5 あめつちの主なる ちちこみたまを
みつかいとともに あがめまつらなん

『賛美歌』(賛美歌編纂委員会編 昭和29年) 72「三一の神」豊田実訳

- 1 われ信ず三つなる ひとりの神を
げに御子(みこ)ひととぞ なりしもみとむ
- 2 十字架に死にたる ひとをばあおぎ
わが身のよこしま ほろぼしつくす
- 3 ひかりといのちと ちからをたまう
聖なるきみをば ひたすらあいす
- 4 あいするゆえにぞ こよなくあがむ
主の建てたまいし 教会(みとの)と教義(のり)を
- 5 ときわにたたえよ 天使とともに
父み子みたまの 天地のかみを

以下にニューマンの賛美歌・詩の翻訳および解説を含むものの一部を挙げておく。

戸川安宅『新選賛美歌のてびき』(警醒社書籍部 明治24)「みめぐみあるひかりよ」の解説及びニューマン小伝。

尾島真治『賛美歌説明』(警醒社書店 明治43)「みめぐみあるひかりよ」を含む。

海老沢亮編著『賛美歌歴史』(教文館 明治43)「みめぐみあるひかりよ」及びニューマン小伝。

植村正久「み恵みある光よ」『福音新報』(明治44年4月20日号)解説 斉藤 勇『植村正久文集』

(岩波文庫 昭和14)に所収。

齊藤 勇『叙情詩集』(山海堂 昭和6)“Lead, Kindly Light”の訳注を含む。

内館忠蔵訳『ゲロンシアスの夢』(聖公会出版社 昭和6)。

由木 康『賛美歌小史』基督教教程叢書第四編(日独書院邦文部 昭和7)「みめぐみあるひかりよ」を含む。

門馬直輔編『宗教音楽全集31』(春秋社 昭和7)「みめぐみあるひかりよ」を含む。

ヘルマン・ホイベルス「やさしき光、導き給へ!…ニューマンの詩」『日本カトリック新聞』(昭和8年12月3日号)。

酒井義孝「第十九世紀に於けるカトリシズム」『創造』(昭和10年10月)“Lead, Kindly Light”, *The Dream of Gerontius* 及びその他の詩の紹介。

—「ジョン・ヘンリー・ニューマンの詩」『創造』(昭和11年1月)“The Pillar of the Cloud”の紹介。

—「ニューマン作『ゲロンシアスの夢』」『創造』(昭和11年10月)*The Dream of Gerontius*の紹介とその一部の訳。

齊藤 勇『英語賛美歌』(教文館 昭和16)「第19世紀中葉—オックスフォード運動をめぐり」を含む。昭和37年に研究社より『賛美歌研究』として改定出版。『齊藤勇著作集』(研究社 昭和52)に「賛美歌史」として収録。

賛美歌委員会編『賛美歌略解』(日本キリスト教団出版部 昭和29)『前編歌詩の部』に「みめぐみあるひかりよ」を含む。『賛美歌第二編略解』(日本基督教団 昭和49)所収。

荒川龍彦「近代文芸精神史の考察—ニューマンとオックスフォード運動」『愛知大学文学論叢』(昭和32年3月)『ゲロンティアスの夢』の抄訳を含む。

賛美歌委員会編 *Hymns of the Church* (日本基督教団出版局 昭和38) *Lead, Kindly Light* を含む。

園部治夫「聖歌の礎を築きあげた信仰詩人たち—12 さ迷うものの道を照らすニューマンの歌」『聖歌の友』(教会音楽研究会 昭和44年12月)

由木 康『賛美の詩と音楽』(教文館 昭和49)「みめぐみあるひかりよ」を含む。

原 恵「イギリスの19世紀の音楽」『賛美歌—その歴史と背景』第7章(日本基督教団出版局 昭和55)

竹内 信『賛美歌の研究』(日本基督教団出版局 昭和55)「たえなるみちしるべの ひかりよ」の解説を含む。

二俣松四郎『女性合唱のための100曲』(日本基督教団出版局 昭和56)「たえなるみちしるべのひかりよ」を含む。昭和59再版。

荒川龍彦「たえなるみちしるべ」『大東文化』大東文化大学新聞(昭和58年10月15日号)

—「みちしるべの光り」『大東文化』大東文化大学新聞(昭和58年12月15日号)

佐藤 裕『聖歌の友—古今聖歌集作詞者略解』(聖公会出版 昭和61)

—『聖歌のしらべ—古今聖歌集歌曲者略解』(聖公会出版 昭和62)

注

(1) 『日本キリスト教文献目録 明治期』(国際基督教大学アジア文化研究委員会編 1965)は明治初期からの数種の邦文賛美歌集の書誌を含んでいる。

(2) *Lyra Apostolica* においては“Light in the Darkness”と題され、*Verses on Various Occasions* では“The Pillar of the Cloud”となっている。

(3) 齊藤 勇「賛美歌史」『齊藤勇著作集第七巻』(研究社 1977) 393～394頁参照。

(4) 石田憲次『ニューマン』(研究社 1937) 82～83頁。

- (5) 『ニューマンの手紙と日記』第4巻 (*Letters and Diaries of John Henry Newman*, Vol. IV. Clarendon Press, Oxford, 1979) には随所にシチリアへの思いが記されている。: “The Froudes make for England after the Holy Week—and I am drawn back by an irresistible love of Sicily, of which I have seen just so much as to wish to see more.” (p.247) “Next Tuesday, we go our separate ways ; the Froudes homeward, I drawn by an irresistible attraction to the fair levels and richly verdured heights of Sicily.” (p.277) “I had lost too my companions, and that with anticipations for the future too painful for me to mention. 《(F.’s death)》 I was going among strangers into a wild country, to live a wild life, to travel in solitudes and to sleep in dens of the earth ; and all for what? for the gratification of an imagination — for an idea of the warm fancy, which might be a deceit, drawn by a strange love of Sicily to gaze upon its cities and mountains.” (p.282) “I am smit with the love of Sicily—” (p.287) “I on my part am smit with the love of fair Sicily—” (p.291) “I never saw anything more than this spot —.” (p.303) etc.
- (6) See : *Letters and Diaries*, Ibid., pp.314~315 ; *Autobiographical Writings*, (Sheed and Word, London, 1956) pp.121-38 ; *Apologia Pro Vita Sua*, (Clarendon Press, Oxford 1967) p.43.
- (7) 国立国会図書館には、1888年版、1890年版、1891年版が収蔵されているが、収録されている讃美歌は全て同一であり、第163番の“Lead, Kindly Light”についても同様である。但し、1890年版は楽譜付、1891年版はソルファー譜付である。いずれも内容は同じであるが、発行や大きさも異なっているので、複本とは言わないようである。1890年版の序文には「主として編輯に従事せしは、松山高吉、奥野昌綱、植村正久の三氏なり。而して之に譜調を附したるは専らオルチン氏の勞なり」とある。
- (8) See : *Apologia Pro Vita Sua*, p. 43.
- (9) メロディについて佐藤裕は次のように解説している。「本曲の原旋律はイングランドのウオリクシャ (Warwickshire) 地方に古くから伝わっている民謡的なバラードであって、ボロードウッド (L. E. Broagwood) が編集した民謡集の中で発見された。それが聖歌用に編曲され、英聖 (1906 初版) に収録されてから、英国で愛唱されるようになった。」(『聖歌のしらべ——古今聖歌集作曲者略解』聖公会出版 1987)
- (10) 日本基督教団賛美歌委員会編『賛美歌 21』(日本基督教団出版局 1997)「まえがき」参照。
- (11) “Lead, Kindly Light” にはダイクス (John B. Dykes, 1865 年作) とパーディ (Charles H. Purday, 1860 作) の二つの曲譜があるが、よく歌われるのはダイクスのものである。ダイクスは 1865 年のある日、霧のかかったロンドンのテムズ河岸通りを歩いていて空に美しい虹を見たとき、ふとニューマンの“Lead, Kindly Light” が心に浮かび、即興的にこの曲を作ったという。(園部治夫「聖歌の礎を築きあげた信仰詩人たち 12 — さ迷うものの道を照らすニューマンの歌」『聖歌の友』教会音楽研究会 昭和 44 年 12 月) 参照。

(1997 年 12 月 15 日受理)